

# 「使える」英語に近づけるための授業づくりの工夫

## － 「意欲」と「気づき」を活かし「定着」につなげる －

学習開発コース (11220912) 鳥海志帆

Foreign language acquisition is not an easy process, and so it is necessary for learners to devote enough time to English study; therefore, they need to be well motivated. The purpose of this study is to search for teaching approaches that better motivate students to learn English, both in the classroom, and on their own time, so that students can understand English better and put it into practical use. In this study, theories of second language acquisition and the concepts and aims of the new Course of Study are taken into consideration.

【キーワード】 意識と意欲, 「使える」と「使いたい」, 気づき, 自律的継続学習, 定着

### 1 問題の所在と方法

#### (1) 問題の所在及び研究の背景

日本人は中学と高校で最低6年間英語の授業を受けても「英語が使えない」とよく言われ、世界的にも日本人の英語力は低いとされている。その一方で、最近「コミュニケーション能力」が重視され、平成25年度入学生から適用される『高等学校学習指導要領』（以下、『学習指導要領』）の外国語科の目標は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」とこととされている。「聞く・話す・読む・書く」の4技能を総合的かつ統合的にバランスよく育成し、生徒に「使える英語」の力をつけることが求められている。生徒が英語を理解し、自分のものにし、使えるようになるためには多くの英語に触れることが不可欠である。『学習指導要領』では特に生徒の発信力を高めることを目標としており、英語を聴いたり読んだりしてその内容を理解し、その内容について自分の考えも加えて、英語で話したり書いたりして伝えることができる生徒の育成が求められている。

平成23年6月末に外国語能力の向上に関する検討委員会が「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」を発表した。そのなかで、グローバル化に伴い、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性の増大と海外への情報発信の必要性やそれを支えるツールとしての英語の重要性が述べられている。英語も含め外国語は子どもたちの可能性を大きく広げる重要なツ

ルであり、日本の国際競争力を高める上での重要な要素であることが指摘されている。グローバル社会で求められる外国語能力とは、異なる国や文化の人々と円滑にコミュニケーションを図ることができる能力であり、そのためのツールが外国語であり、円滑にコミュニケーションを図ることができる能力には、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などが含まれるとしている。このことを、新学習指導要領の言語活動の充実と関連させて考えると、英語の授業は生徒の言語活動を中心として、思考力・判断力・表現力等の育成を図るものになっていることが求められているのだ。この提言においても、生徒にグローバル社会における英語の必要性について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図ること、授業以外に英語を使う機会がほとんどないが、英語は実際に使うことによって習得するものであるため、授業で生徒が英語を使う機会を増やすことの必要性が述べられている。

英語を読んだり聞いたりしてある程度の内容は理解できるが、そのことについて自分で英語を使用して、内容や感想、意見を伝えることはできないという生徒が多いのではないだろうか。一般的に英語を重要であると捉えているが、その認識とは関係なく英語学習や英語使用に対する意識や意欲は多様である。日本人の英語力の低さの原因の

1 つとして「文法・訳読」式の授業形態が批判され、英語の授業は「コミュニケーション」活動を重視するべきだという指摘が多くなされてきた。これまでの英語授業は実際の「コミュニケーション」と切り離された文法指導が行われていたことに問題があると言えるだろう。「コミュニケーション」を支えるものとして「文法」は不可欠であるということを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けた文法指導を行うことが求められている。しかし、日本では「英語が理解できないと生活に困る」ということはなく、英語を外国語として学習する(EFL)。この環境は英語を第一言語、あるいは母語として学習する環境や生活のために必要な第二言語として学習する環境(ESL)とは異なる。教室の外で英語に触れる機会がほとんどないEFL学習環境では自然と文法が身につくほど十分に英語に触れることは期待できないため、英語は母語である日本語とは異なることを理解し、英語を使うために必要な規則として「文法」を理解し、習得することが英語を使いこなせるようになるためには必要である。文法習得は理屈ではなく、文脈や状況から判断させ、理解させ、ある特定の英語表現の使い方・使用場面に気づき、それを理解し、実際に使ってみることで身につく「活用できる文法」の習得が望ましい。そのために対人的なやりとり、つまり「コミュニケーション」の機会を十分に設けることが必要である。

教育実践プレゼンテーションⅠでは、「外国語」として英語を学習し、教室外で十分な英語に触れる機会のない日本で、高校生が学校の授業を通して「使える」英語が習得できるようになるための鍵と思われる要素がいくつか明らかになった。その1つは、英語学習に対する生徒の意識と意欲である。英語の学習に対する必要感や意義を感じなければ、英語学習は機械的な作業にとどまり、「定着」に至らず、「使える」ようにはならない。さらに、学習した内容を自分のものとして「定着」させるまでの過程も重要である。何をどのように学習することが「定着」に効果的につながるのか、授業では言語活動とコミュニケーションをいかに関連づけることが有効なのかも考慮すべきであることがわかった。これらのことを意識してどのように授業を展開するのか、どのような活動を、どのような流れで実施するのが課題としてあげられた。

## (2) 研究の目的

- ①『学習指導要領』で求められている英語力を育成する授業方法を検討する。
- ②「使える」英語を習得させるために、生徒に英語を「使いたい」「使えるようになりたい」と思わせる(動機づけ)方法を探り、学習意欲を高め、主体的に学習する自律的学習者を育てる方法を追及する。
- ③生徒が「意識」しながら英語を理解し、使えるようになるための授業展開や学習方法の探求を試みる。

## (3) 研究の方法

- ①文献研究で、第二言語習得研究や様々な教授法・指導法について検討し、実際に「使える英語」の力を身につけることを意識した効果的な方法を探る。
- ②授業研究を通して、生徒に「使える英語」の力をつけるための有効な表現活動を研究し、実践を踏まえ、活動を活かす効果的な授業展開のあり方を検討する。

## 2 先行研究の検討

### (1) 第二言語習得

ここで言う「第二言語」とは、第一言語(母語)以外の言語を意味する。ある言語の学習環境が「外国語」である(EFL)のか、「第二言語」である(ESL)のかの環境の違いを述べる際の「第二言語」とは異なる。子どもではない学習者が第二言語をうまく習得するには、その言語の学習に対する必要性やその言語が話されている国・地域、その文化や人などに興味関心、また、間違いをあまり恐れずにコミュニケーションを図ろうとする姿勢が成功の鍵と言われている。そこで第二言語習得研究における学習者の意欲と学習成果の関連性、効果的なインプットとアウトプットの方法やその過程について文献研究を行った。

### ①動機づけについて

白井(2008)は日本人が英語ができない大きな理由の1つとして動機づけの弱さをあげている。それは日本国内では英語が使えなくても実際に困らないからである。ただし、動機づけの強弱と学習量と能力の伸長の関連について数値で示すことは難しく、まだ明らかになってはいない。それでも第二言語習得において何らかの影響を及ぼしているものとする。

## ②インプットとアウトプットについて

白井(2008), Brown(2007), Lightbown and Spada(2006)はすべて、インプットとアウトプットのバランスと、意味のある理解可能なインプットを与えることの重要性を指摘している。アウトプットには自動化の効用があるが、インタラクションの前提としての十分なインプットが欠かせない。また、英語学習の初期段階でのスピーキング重視のマイナス影響にも言及している。「話す・書く」よりも多く「聴く・読む」を意識して活動を設定すべきなのであろう。

## ③自律的学習者の育成について

Brown(2008)は、学習者の自律・意識(自覚)・実行が重要な役割を果たし、学習者自身が自律的学習者となり、自分に適した学習スタイルに気づくべきであり、自発的学習と自己の学習に責任を持つことの重要性について言及している。

### (2) 表現力(アウトプット)の育成

金子(2012)は、新課程で育てる英語で表現する力に関して「伝えたい」意欲を高める指導について述べている。話したり、書いたりすることは、聞き手や読み手とコミュニケーションを行う社会的な行為であり、伝える内容を持ち、伝える目的と必要性があって行われるものであるとし、コミュニケーションの道具として英語を用いて発信するためには、正確で適切な英語使用の重要性に気づき、発信の根源である「伝えたい」意欲を持ち続けることが重要であるとしている。そして「書く」活動を中心にした意欲向上の方法を述べた。また、コミュニケーションとしてのライティング活動を効果的に実施するには伝えたいという意欲に加えて基本的な英語力が当然必要になる。伝えたい内容があっても英語力が不足していれば適切な英語は書けない。伝えたい内容が上手く表現できないと、伝えたい意欲も低下し、悪循環に陥る。伝えたい意欲と英語力をバランス良く育成することが必要だと示唆している。生徒の書く能力についての問題点として言語情報の処理速度の遅さをあげ、処理速度を上げるために情報処理の自動化が必要であり、メッセージを形成する概念化、それを文法化・文字化する形成化、書く運動機能のプロセスを経て完成する書く行為、自分や他人が発信する情報を読み、理解するプロセスを経て、概念化に戻るサイクルを繰り返すことで自動化は進むと述べている。このことを考慮して書く活動

を考えなければならない。

平原(2012)も、「使いたい」という動機と「インテイク」(内在化)の関連を指摘し、「英語を使いたい」という学ぶ意欲が、生徒の自発的な表現を促す「インプット→インテイク→アウトプット」の準備段階として必要であり、生徒に英語を楽しませ、「使いたい」と思わせたうえで、使えるための文法指導とアウトプットを結びつけることが重要だとしている。生徒の活動が促進されるレッスンプランは意味のあるコンテキストの中で文法事項を導入し、それが使用される必然性を理解させてルールの内在化を図り、無理なくアウトプットに有機的につながるものであるとしている。

話すことに関しては、向後(2011)が『学習指導要領』で求められている4技能統合におけるスピーキング指導について言及し、すべての授業の中心は言語活動であり、それは言語材料を理解させる場合も当てはまるとしている。何のために理解するのかを明確にし、様々な活動を通して理解を深めるよう注意を促すことが肝要である。

### (3) 授業展開

#### ①文法指導について

村野井(2011)は、『学習指導要領』では文法指導の在り方について「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と記載されている理由として、現状のコミュニケーションと切り離された文法学習、言語活動と結びつかない文法指導をあげ、生徒が文法を使えるようになる指導のあり方について言及している。文法規則を記憶するのが文法学習ではなく、それではコミュニケーションに直接役には立たない。学習者の中に文法体系という「植物」を育てるという有機的なアプローチで教え方を変え、「模倣反復だけではなく、水や光を与え(インプット)、肥料(明示的説明)を補い、文法の芽が自ずと伸びる機会(アウトプット)を整えると、花(文法システム)が咲く」とした。第二言語習得理論では文法習得を、形・意味・使用/機能のつながりを把握することであり、その文法の運用能力を高めるためにコミュニケーション・タスクを用いた言語活動が有効である。また、学習者がインプットの意味処理をする十分な機会を与え、学習者自身に自分の言語体系を構築させる必要性、つまり言語知識が自動化するためにドリルも必要である。さらに「やつ

ていて意味がある」と生徒が感じる言語活動を行うべきであり、文法と語彙によって支えられた意味ある言語活動についても言及している。

## ②言語活動について

文法の運用能力を高めるために、コミュニケーション・タスクを用いた言語活動の有効性が指摘されている。効果的なタスクの条件は a) タスクの到達点が明確であること、b) タスク完了のために情報交換が必須であること、c) 実際のコミュニケーション活動と同じか類似した作業であること、d) 内容が学習者の興味・関心・知的レベルに合致していることである。

向後(2011)は『学習指導要領』上の言語活動と「話すこと」の指導について、様々な活動を関連させ、それらを活かして理解を深める指導の必要性を訴えている。また、言語活動の充実は今教科で思考力・判断力・表現力等を育成する観点から言語活動の充実を図ることとされており、複数の技能が統合された言語活動の必要性について言及し、不可欠な学習活動の内容として次の6点をあげている。a) 体験から感じ取ったことを表現する。b) 事実を正確に理解し伝達する。c) 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。d) 情報を分析・評価し、論述する。e) 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。f) 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

## ③授業形態

「プロジェクト型学習」は、コミュニケーション活動を授業で展開していくことが求められる学習指導要領下で、「学習者の主体性を引き出して意欲を高める」「英語に触れる量・質ともに向上する」「英語で表現することに前向きになる」「生徒同士の学び合いを深める」などの利点が注目されている。田中(2011)はプロジェクト型学習は discussion, research, presentation の3つの活動を含み、これが方法論上の大きな特徴であるとしている。アイディアの創造・言語化・共有化の3つを discussion の狙いとし、現状把握と可能性の2つを research の狙いとしている。research は discussion に素材を提供し、アイディアの有効性を確認する手段であり、この2つを相互に作用し合うことが創造的思考の実践に必要であると述べている。さらに、構想されたアイディアを外部に差し出す行為が presentation であり、効果的な

presentation にはスキルが必要であるとしている。この presentation を行うことでフィードバックが得られ、それがさらなる discussion や research の契機となり、この3つの相互行為の連鎖がプロジェクト型学習の根底をなす原理であると述べている。

教科書を使用したプロジェクト学習の方法として、レッスンのテキスト全体に a) overview, b) language in text, c) content construction, d) discussion & presentation の4つの側面(活動タイプ)からアプローチするやり方を構想している。overview の役割は射程を設定し、全体像を把握することであるが、この際テキストを approachable にする工夫が必要である。language in text は語彙、文法、慣用表現の観点からテキストを構成する言語そのものに注目することであり、テキストを構成する言語を丸ごと学習対象とし、文法とテキストを分離させず、grammar in text という観点を重視することが特徴である。content construction は生徒中心のプロジェクトで、英文の理解における読み方によって内容構成の仕方が異なることに注目している。生徒自身が読んだテキストの内容を独自の創意工夫を生かして構成することで、テキストへの積極的な関わりが行えること、テキストのタイプによって content construction の仕方が異なり、その違いが、情報構造の組み立て方やレトリックという方法への気づきを与えることが大切である。discussion and presentation はまさに生徒中心のプロジェクトであり、ポイントはテキスト内の論点を見出し、それについて教室内でグループに分かれ、議論を行い、必要に応じてリサーチを行い、そして議論やリサーチの結果のプレゼンテーションを教室内で行うというものである。

プロジェクトは協働作業であり、authentic で meaningful で personal な活動になるし、明確なアウトプットをするため達成感にもつながり、活動の多面性により英語が苦手な生徒の活躍の場も考えられ得る。

金谷ら(2012)が提唱する授業では成果は「見える」形にすること、生徒に英語で話し、書くことの必要性を認識させて、授業に対する意識を変革する重要性を授業における留意点としてあげている。また、アウトプットに関しては十分なインプットが前提となり、4技能の統合することは同配

分にすることではないことが指摘されている。十分なインプットは a) 授業の流れの中でルーティン化され、何度も繰り返し用いられること、b) 長くなく、真似・再生しやすいものであること、c) 生徒の理解の範囲内であること、d) 教師と生徒の自然なやりとりの範囲内であること、の4点が述べられている。さらに、ライティングについてはフィードバックに言及し、ポイントを絞った、書き直しなど次の課題を見据えた、意欲を低下させない内容についてのものであるべきとしている。

どの視点も、実際のコミュニケーションは双方向であることを念頭においている。授業中にインタラクションの場を設けるためにペアやグループでの活動を取り入れることの有効性を忘れてはならない。そして、生徒の意欲を維持し、能力を伸ばすことを可能にするためには、やりがいがあり、遂行可能である目標の設定も重要であることを意識して授業を組み立てることが望ましい。

### 3 実践と結果及び考察

#### (1) A 高校での授業実践について

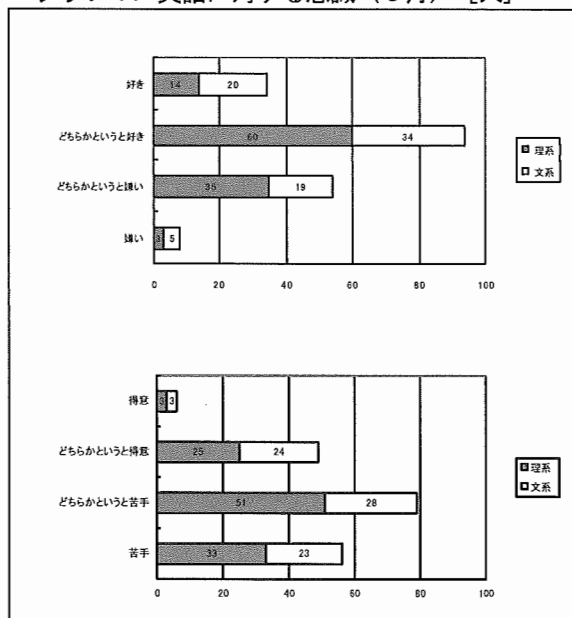
##### ①対象生徒について

山形県内公立高校の3年生、特に文系の生徒を対象にしている。文系はほとんどの生徒が選択科目の英語を履修しており、理系よりも英語の授業時間が多い。その授業はコミュニケーションを重視し、実際に英語を聴く・話す・読む・書く活動に重点をおいている。5月に実施した英語に対する意識に関するアンケートでは、全体で126人(67%)、文系で54人(71%)の生徒が英語を「好き」「どちらかという好き」と答えた。その一方で、英語が「得意」「どちらかという得意」と答えた生徒は全体で55人(29%)、文系で27人(36%)であった。また、4つの技能(聴く・話す・読む・書く)に対して「自信がある」「少しある」と答えた生徒は、[聴く][話す]では約35人(15%程度)、[読む]では70人(37%)、[書く]では61人(31%)であった。なお、4つの技能すべてにおいて生徒の95%以上が「できるようになりたい」「少しなりたい」と答え、英語に対する苦手意識に関わらず、英語の重要性を感じ、使えるようになりたいと思っていることが明らかになった。

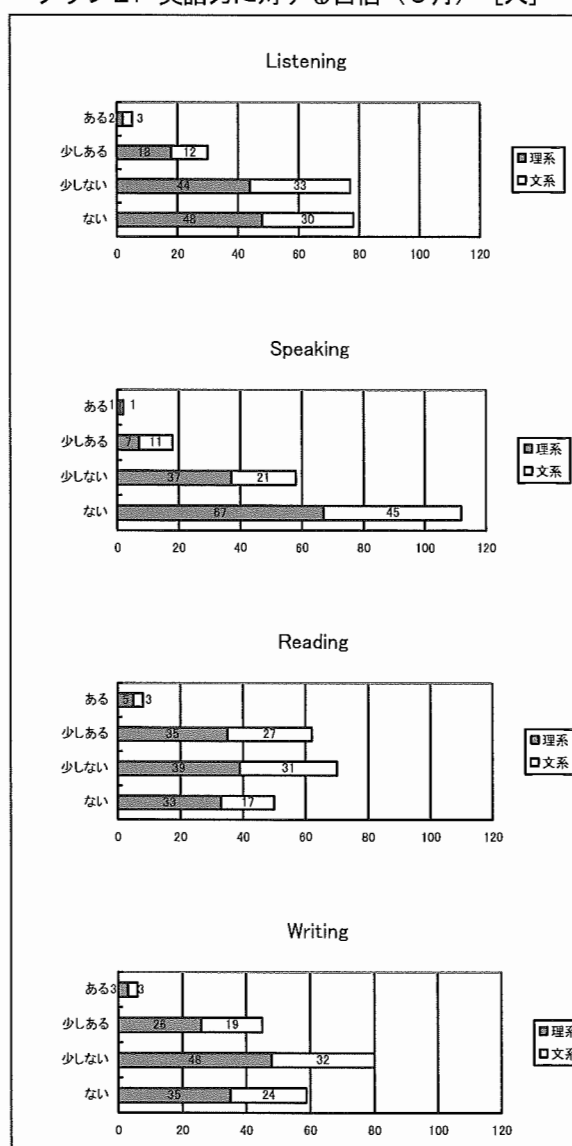
##### ②授業実践について

教科書などで多くの英語を目にしているが、読んで理解できても聴いて理解できない、「話す・書

グラフ1. 英語に対する意識(5月) [人]



グラフ2. 英語力に対する自信(5月) [人]



く」を通して自己表現できない生徒が多い。目で見ている文字とその音が一致した状態で定着していないのではないかと考えた。その対策としてすべての授業において「音読」を活用した。声に出して英文を読むことで音・文字・意味を関連させて一緒に定着させることを意識させた。また、実際に英語を使うことで生徒の英語学習に対する意識や意欲が変化し、「使える」と感じることでもっと「使いたい」と思い、効果的な英語学習が行われるのではないかと考えた。そのため授業では英語を使用する場面を可能な限り増やすよう心がけ、そのなかで生徒に英語を「意識」しながら理解したり、使わせたりして、「再認識（気づき）」させることで、「意識」しなくても使える、つまり「定着」につながるのではないかと考えた。流れの一例は「英語に触れる（読む・聴く）→考える→話す（意見交換）→書く」の繰り返しである。書いたものはALTがチェックする。その後、気になる間違いなどを全体的に指摘しながら返却（フィードバック）し、生徒に「気づき（再認識）」を促し、次回「意識」して使わせる。この流れのなかで「聴く・話す・読む・書く」の関連性にも注目を促す。英語習得に興味を持たせるために、楽しいだけではなく、深い、意味のある活動を取り入れ、ALTとのTTも効果的に活用し、「自分の英語が通じる」という実感や、「英語で話したい」と感じさせることで英語学習への「意欲」が高まり、学習意義が生まれ、学習効果も高まり、言語活動に対する取り組みが積極的になり、徐々に自信をつけ、主体的・自律的に英語学習への取り組みを促し、「使える」英語に近づけることを試みた。

書くという作業には「思考力・判断力・表現力」のすべてが必要とされ、これは『学習指導要領』において英語に限らずすべての教科で言語活動を通して生徒につけることが求められている力である。生徒にある程度まとまった英文を書かせるためには「書く目的」が必要であり、効果的な場面が設定できれば「話す」力につながるのではないかと考えた。そこで、あるテーマについての英文を聴き、読み、そのことについて意見交換をし（話し）、まとめの作業として書く活動を設定した。テーマや個人的な関心の度合いにより差はあるが、徐々に書くことに対する抵抗は減り、相手に伝える、理解してもらうことを意識しながら英文を書くようになったと感じている。また、生徒の書いた

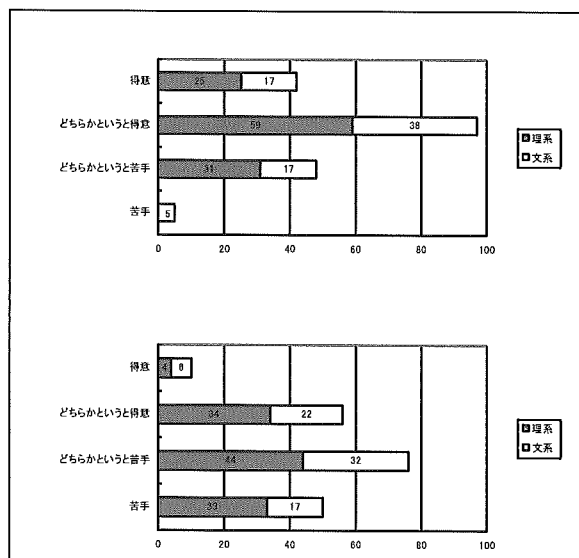
英文を回収して確認することで、話す作業ではなかなか個別に確認できない英語の使用における生徒の間違いなどが把握でき、フィードバックに活かすことができた。生徒の間違いには基本的な語法・文法上の誤りだけではなく、母語である日本語がかなり影響していると予想される間違いが多いことがわかった。

さらに、授業で聞いたり読んだりする目的を生徒に事前に理解させ、聞いたり読んだりした後に、何を話したり書いたりするのかを把握させ、それに応じて聞き方読み方を変えるよう促すことを意識した。また、『学習指導要領』の目標の柱の1つである「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」ことができるようになる、つまり、英語の音声や文字を使用して実際にコミュニケーションを図る能力をつけるために、場面や状況、相手の反応などを踏まえながら、自分が伝えたいと思うことを相手に伝えるようにすることを目標とし、双方向のコミュニケーション活動と現実のコミュニケーションを念頭におき、即興で話すことを意識した活動を実施した。

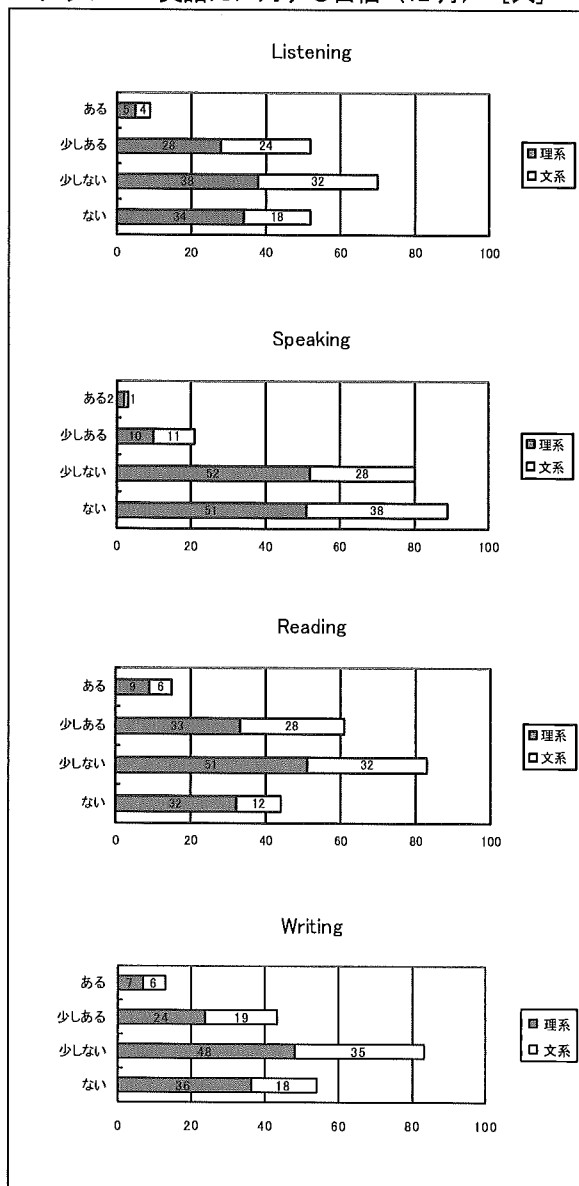
また、4 技能の関連性を意識した授業を試み、学期の終わりにパフォーマンステストを実施した。1学期のまとめは生徒1人ずつがALTとインタビューを行った。事前に自分で選んだテーマについて約3分ALTに話し、それについてALTからの質問に答える形式である。事前に話す内容を考えることはできるが、原稿読み上げは禁止したため、ある程度即興に近い形で実施できたと考える。評価については事前に観点を決め、ALTのその場での評価とJTEが録音したものを聞いて行った評価を合わせた。このテストでは、取り組みはかなり前向きであるが、質問への対応から判断すると「聴いて理解する」力が弱いことが明らかになった。

2学期のまとめは3人でのディスカッションを実施した。生徒3人にその場でテーマを英語で与え、3分の準備時間の後にディスカッションをし、流れや時間に応じてALTからの追加質問や問題提起がなされた。評価は事前に決めた観点に基づき、ALTとJTEがその場で行った。生徒の取り組みは以前よりもさらに意欲的になったように感じられたが、テーマが難しいこともあり、短時間で自分の考えをまとめ、さらに他者の意見を聞き、理解した上でそれに対するコメントをすることに難しさを感じているようだった。テスト後のアンケート

グラフ3. 英語力に対する意識（12月）〔人〕



グラフ4. 英語力に対する自信（12月）〔人〕



トでは「思ったより英語が話せないとわかった」など、「言いたいこと」と「言えること」のギャップを再認識したと思われる感想が多かった。「できない」と気づいたことで自信をなくした生徒も多かったようだが、意欲は失わず、逆に「もっと頑張ろうと思った」など英語に対する学習意欲が上がったと感じられる感想が多かった。

5月に実施したアンケート調査と同じ内容のものを1学期まとめのインタビューテスト後の7月、2学期まとめのディスカッションテスト後の12月に実施したが、苦手意識が緩和された以外は数値上の変化はあまり見られなかった。ただし、生徒のコメントには変化が見られた。5月の「苦手科目」という意見が12月には減り、「もっと英語を頑張ろうと思った」「わかれば／できれば楽しい」「使えるようになりたい」「ALTともっと話したい」などの意欲面で前向きな変化がみられ、「受験科目・教科の1つ」という捉え方から「将来役立つ・必要になるもの」「コミュニケーションの手段」「世界を広げるもの」という考えに変わった生徒が多かった。話したり、書いたりする活動において、「自分の意見を相手に伝えよう」とする心がけや、授業中や授業外でも英語を使おうとする姿勢が見られた。

#### (2) B 高校での教職専門実習Ⅲについて

##### ①対象生徒について

県内公立高校1年生でペアワークとグループ学習をメインにした授業を行った。英語によるインタラクションはもちろん教科書の内容についての意見交換の場としても有効に機能させることに留意した。他者との話し合いにより、疑問点が解決したり、考えが深まったりしているようであった。さらに各班の意見をクラス全体で共有することで理由や根拠について深い思考が促されるようであった。特にジグソー学習を取り入れた授業では普段よりも積極的に取り組む姿が多く見られた。しかし、班構成に留意しないと意見交換が進まず、グループが機能しないことも明らかになった。

#### 4 まとめ

##### (1) インプットとアウトプットについて

アウトプットができるようになるためには、その準備が整っていないといけない。生徒に十分なインプットを効果的な形で与え、それを生徒が理解し、自分の言語体系に取り組むことで初めて



定着し、使えるようになる。生徒の学習段階を考え、理解可能なインプットを与え、それを使用しなければならない場面を設定することが必要である。さらに実際のコミュニケーションを意識し、即興性の求められるアウトプット活動も取り入れる必要がある。アウトプットすることで、生徒自身が自分の使用する英語に気づき、それが定着を促進する。

## (2) フィードバックについて

生徒のアウトプットの間違いを指摘すること(フィードバック)が必ずしもすぐに修正につながる訳ではないが、「気づき」を促すことでインテイクにつながっていると推測した。アウトプットする際に「通じればいい」という思いが強すぎると正しい英語には近づかない。逆に間違いを気にしすぎてアウトプットの量が減るとフィードバックを与えることができない。また、フィードバックのタイミングと方法、内容と量に留意しないと効果的に作用しない。また、高校入学段階からの間違いが卒業間近になっても直りにくいことから、化石化と呼ばれる間違いの定着の修正はかなり困難であるため、初期指導が重要であると言える。

## (3) 学習者について

個々の学習者の習得体系は異なり、それぞれに適した学習スタイルを提供することが求められる。また、日常生活で英語に触れる機会はほとんどなく、限られた授業時間で十分な英語に触れることはないため教室外でも意識的に英語に触れる必要がある。学習意欲が能力向上に影響するかどうかは数値では測れないが、取り組まないよりは取り組んだ方が学習効果はあり、英語力は向上する。さらに授業外でも英語に意識的にかかわることが英語力向上には不可欠である。主体的自律的学習者の育成を意識することが生徒の英語力向上にプラスの影響を与える。

## 5 到達点と課題

- ①生徒のアウトプットで学習段階を確認し、適切にフィードバックすることが重要であるとわかったが、生徒個々の状況把握と評価の方法が難しい。
- ②定着のために十分なインプットと適切なアウトプット活動が必要であることが明らかになったが、どのような活動が効果的で、どのような流れで実施することが定着につながるのか、さ

らに研究が必要である。

- ③授業内の英語だけでは質も量も限界があり、不十分である。教室外で自主的に英語に触れる継続的自律的学習者を育成するための有効な手立てを考える必要がある。
- ④生徒につけたい力を明確にし、手順とともに提示することが必要であるが、英語によるコミュニケーション能力と現在の大学入試で問われる英語力の両方を向上させる方法を追求する必要がある。

## 引用・参考文献

- Broun, H. Douglas, “*Principles of Language Learning and Teaching, Fifth Edition*”, Pearson Education, Inc., 2007
- 外国語能力の向上に関する検討会:「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm) (最終閲覧日 2012年10月12日)
- 平原麻子:「アウトプットへつながるインプット」, 『英語教育』, 第61巻, 第3号, pp. 21-24, 2012
- 金谷憲編:『英語授業ハンドブック(高校編)』, 大修館書店, 2012
- 金子朝子:「「伝えたい」意欲を高める指導」, 『英語教育』, 第61巻, 第3号, pp. 21-24, 2012
- 向後英昭:「4技能統合におけるスピーキング指導はどうあるべきか」, 『英語教育』, 第60巻, 第4号, 2011
- 文部科学省:『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』, 開隆堂出版, 2010
- 村野井仁:「新学習指導要領における文法指導 文法指導に関する5つの誤解」, 『英語教育』, 第60巻, 第7号, 2011
- Patsy M. Lightbown and Nina Spada, “*How Language are Learned, Third edition*”, Oxford University Press, 2006
- 白畑知彦編:『英語習得の「常識」「非常識」 - 第二言語習得研究からの検証 - 』, 大修館書店, 2004
- 白井恭弘:『外国語学習の科学 - 第二言語習得論とは何か - 』, 岩波書店, 2008
- 田中茂範:「なぜ「プロジェクト型」学習なのか - 英語教育における可能性」, 『英語教育』, 第60巻, 第9号, 2011